自己の観点から見たPISA型読解力

広島大学大学院 院生　　永田麻詠

1　はじめに

本稿の目的は、PISA調査で求められる読解力（以下、「PISA型読解力」とする）を自己の観点から考察し、学習者に育てるべき読解力にPISA型読解力を位置づけることである。

今日読解力をめぐる議論は、PISA型読解力を中心になされ、たとえば石原千秋（2005）のように、読解力の育成は、PISA型読解力を育成することであるととらえられることがある。また、PISA型読解力は、2008年度版学習指導要領にも大きく影響しており、読解力の向上を考える上でPISA型読解力は欠かせないものとなっている。

しかし自己の観点から見れば、PISA型読解力は学習者に育てるべき力として有効な面と、その育成だけでは読解力として不十分な面があると考えられる。本稿では、自己と特に深く関連すると思われる文学的文章を対象とした問題に着目し、PISA型読解力の有効性と課題を自己の観点から整理する。

2　PISA型読解力の概要

2002年に刊行された、『生きるための知識と技能―OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2000年調査国際結果報告書』（以下、『生きるための知識と技能』と略。また、カッコ内のページ数は本書を指す）によれば、OECDはPISA調査の目的を次のように示している。

> PISAは、学校の教科で扱われているようなある一定範囲の知識の習得を超えた部分まで評価しようとするものであり、生徒がそれぞれ持っている知識や経験をもとに、自らの将来の生活に関係する課題を積極的に考え、知識や技能を活用する能力があるかをみるものである。常に変化する世界にうまく適応するために必要とされる新たな知識や技能は、生涯にわたって継続的に習得していかなければならないからである。その意味では、生涯にわたって学習者であり続けられるような知識、技能がどの程度身に付いているかを見るものでもある。（p.2）

上の引用からOECDは、「自らの将来の生活に関係する課題を積極的に考え」ることや、「常に変化する世界にうまく適応する」こと、「生涯にわたり学習者であり続けられる」ことが、子どもたちに必要な「生きる力」であるととらえていることがわかる。

また、OECDは『生きるための知識と技能』において、国や文化を問わず、生徒が発達させるべき広範で総合的な技能として、「コミュニケーション能力、順応性、柔軟性、問題解決能力、情報テクノロジーの利用」（p.10）を挙げている。これは2004年版においては「コミュニケーション能力、順応性、柔軟性、問題解決能力、情報技術の活用」（p.10）、2007年版においては「コミュニケーション能力、対人関係能力、順応性、柔軟性、問題解決能力、情報通信技術の活用能力」（p.10）となっている。

OECDが想定する学力は、将来の実生活など子どもたちの生きることそのものとかかわっている。また、学力には「コミュニケーション能力」や「対人関係能力」も含まれており、学習者の自己という観点を抜きにしては成立しないものであると考える。コミュニケーションも対人関係も、生きることそのものも、すべて自己を基盤としてなされるものだからである。

以上のような学力観を前提とするPISA型読解力は、『生きるための知識と技能』において次のように定義されている。

> 読解リテラシーとは、自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発展させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力である。（p.13）

そして読解力は、「将来それぞれのコミュニティに積極的に参加することを期待されている生徒たちの手段あるいは道具」(p.13) であること、各人のニーズを実現するのみならず、社会貢献までをも見通した力であることが示されている。

また、定義中の「理解」「利用」「熟考」は、「読解には相互作用的な性質があり、読み手は、テキストに連動して自分の考えや経験を呼び起こす」(p.13) ということが考慮されているという。PISA 調査における読解力は、「「読むための学習」に必要な技術的な技能というよりも、「学ぶために読むこと」に必要な「知識と技能」」(p.31) なのである。

「読み手は、テキストに連動して自分の考えや経験を呼び起こす」という指摘は、学習者がテキストに連動して自己を認識することであると考えられる。PISA 調査では、読むことを通して自己を認識し、それを活用・表現すること、すなわち“学ぶために読む”ことが求められている。PISA 調査が示す読解力とは、“学ぶために読む”力であり、「読み→自己の認識→活用・表現」という読解の流れが考慮された力なのである。

このように考えれば、PISA 調査において自己の認識は、書かれたものを読むことや、その上で自分の考えを「活用・表現」するための手段に位置づけられているととらえられる。PISA 調査において学習者は、「読み」や「活用・表現」のために自己を認識することが求められている。

3 「熟考・評価」をめぐって

PISA 型読解力は、「読み→自己の認識→活用・表現」という読解の流れが考慮された力であり、PISA 調査において学習者は、「読み」や「活用・表現」のために自己を認識することが求められていることを確認した。ここでは、手段としての自己の認識が特に求められるであろう「熟考・評価」の問題を中心に、論を進めていく。

難波博孝は、「文学体験」と「対話」から、文学的文章の読解について論を展開している。難波が論じる「文学体験」には、読者の分身が「作品世界」に入り込み、登場人物と同じように喜び悲しむ「同化」、登場人物に距離をおき、「わたしだったらこうするのに（しないのに）」などと、自分の分身から少し距離をおく「対象化」、文学体験を経た分身が、現実世界に戻り、いつもの自分と対話し、現実の自分の言動に影響を与える「典型化」の 3 つの「体験」があり、「同化体験」を低学年、「対象化体験」を中学年、「典型化体験」を高学年の到達目標としている。

さらに「典型化」に関して難波は、次のように述べている。

> 「いつもの自分ではない自分」が「いつもの自分」と統合されるとき、分裂を孕んだものとなります。それは「作品の中に入り込んでいろいろ考えた自分」と「そうしなかった自分」との分裂であり、「いつものではない・しかも文学体験を経た自分」と「いつもの自分」との分裂です。
>
> この 2 つの自分は、私の中で対話を始めます。(中略―引用者) 文学体験を経た分身が、現実世界に戻り、いつもの自分と対話を始め、現実の自分の行動や思考感情に影響を与えることを、「典型化」と呼びます。
>
> 「典型化」は単なる、現実の自分から見た作品の人物への批評ではなく、私の中の、文学を体験した自分と現実の自分との対話から起こる葛藤です。(難波ほか 2007:29)

こうした論を見てみると、「同化」「対象化」「典型化」といった「文学体験」の成立を目指す難波の読解力は、PISA 型読解力のように、自己の認識を書かれたものを読むことや、その上で自分の考えを「活用・表現」するための手段というよりも、読むことや、自分の考えを「活用・表現」する上での目的としてとらえているように思われる。

特に「典型化」においては、PISA 型読解力のように、テキストや作者について「熟考・評価」するだけでなく、テキストと対峙した自己を「熟考・評価」することを求めている。また、難波の論から PISA 型読解

力を見てみると、「熟考・評価」で問われているのは「現実の自分から見た作品の人物への批評」であると考えられる。PISA 型読解力では、自分の読みや考えたことを「活用・表現」すること、「現実の自分から見た作品の人物への批評」が主に求められ、「同化」や「対象化」、「典型化」という「文学体験」を経た自己を認識することそのものは、設問に反映されない。「私の中の、文学を体験した自分と現実の自分との対話から起こる葛藤」は、問われないのである。

このように難波の論では、自己の認識を文学的文章の読みの目的としており、PISA 型読解力では自己の認識を読みの手段ととらえており、両者には差異が見られる。手段としての自己の認識（PISA）、目的としての自己の認識（文学体験）という差異をふまえながら、次に PISA 調査における文学的文章の問題を取り上げ、「熟考・評価」について引き続き検討する。

PISA 調査（読解力）における文学的文章の問題で、2009 年現在公開されているのは「贈り物に関する問題」である。「贈り物」における「熟考・評価」の問題は以下の 2 問であった。

> 問 1　以下は、「贈り物」を読んだ二人の会話の一部です。
> 話し手 1：ぼくは、物語のなかの女性は心が冷たく残酷だと思う。
> 話し手 2：どうしてそう言えるの？私は、彼女はとても思いやりのある人だと思うわ。
> この二人が自分の意見を証明するには、それぞれどう言えばよいでしょうか。この物語からそれぞれの証拠をさがして、次に示してください。(p.226)
> 問 7　「贈り物」の最後の文が、このような文で終わるのは適切だと思いますか。最後の文が物語の内容とどのように関連しているかを示して、あなたの答えを説明してください。(p.233)

問 1 は、話し手 1 と話し手 2 の意見について本文を根拠に証明するものであり、問 2 はテキストの形式面を評価する問いである。問 1 の採点基準に関しては、「問題文を正確に理解し、明確な根拠を物語り文中から探し出して提示し、説得力のある答えを書けば正答」(p.227) と記されている。PISA 型読解力では、自らの意見を「活用・表現」する際に、本文中から根拠を示すことが重視される。

「本文中から根拠を示すこと」については、PISA 調査（読解力）の主査を務める国立教育政策研究所の有元秀文が、次のように述べる。

> 「解釈」については、国際的な基準では、「必ず書いてあることを根拠にしなければいけない」ことを教える必要があります。第三段階の「熟考・評価」とは、「本文をよく読んで、自分の体験や知識と結びつけて、自分独自の意見を述べること」です。つまり、「読んだことについて自分の意見を述べる」ことですが、やはり必ず「読んだことを根拠に」しなければなりません。(有元 2008:65)

有元は、「書かれたこと」や「本文」を根拠にすることの重要性を繰り返し強調する。一方、「文学体験」を主張する難波は、次のように述べる。

> 小学校の授業で、よく「なぜ君はそう思ったのか、根拠を文章の中から述べなさい」という質問があります。この質問は諸刃の剣です。根拠は、文章の中だけでなく、子ども自身の中にもあるからです。特に「対象化」体験の場合は、登場人物の行動や思いと自分のそれとを比較する（そしてそれを友人とも比較する）ことになりますから、自分自身の体験を思い出させることがとても重要になります。(難波ほか 2007:43)

このように、自己の認識を読みの手段とするか目的とするかの差異は、「活用・表現」の根拠をめぐっても明確に表れる。

PISA 型読解力で求められるのは、有元が指摘するように「本文をよく読んで、自分の体験や知識と結びつ

けて、自分独自の意見を述べること」である。つまり自己の認識は、本文と自分の体験や知識を結びつける手段、本文に対し自分独自の意見を述べる手段であるため、自分の読みを「活用・表現」する上での根拠は、“本文”という枠から出ることはないし、出るべきではない。一方「文学体験」において読みは、「登場人物の行動や思いと自分のそれとを比較する（そしてそれを友人とも比較する）」、すなわち自己の認識を目的とするため、自分の読みを「活用・表現」する上での根拠は、“本文”という枠にとどまらない。

4　学習者に育てたい読解力

PISA 型読解力では、テキストや作者について「熟考・評価」することが求められており、テキストと対峙した自己を「熟考・評価」することは求められていない。自己の認識は、PISA 型読解力においては読みや「活用・表現」の手段であった。一方、難波の「文学体験」では読みにおいて、テキストと対峙した自己を「熟考・評価」することが主に目指されており、自己の認識は読みや「活用・表現」の目的とされていた。

よって、自己の認識を読みの目的としてとらえる「文学体験」を重視した読解力では、PISA 型読解力（特に「熟考・評価」の問題）への対応が難しい側面があり、自己の認識を読みの手段としてとらえる PISA 型読解力は、手段として求められる範囲の、また“本文”という枠内に収まるだけの狭く表層的な自己の認識のみを学習者に求めることとなり、「文学体験」を経た豊かな読みを取りこぼしてしまう一面がある。

PISA 型読解力の考え方は、自己の認識を読みの手段とする力を育てる上で有効であるが、読みの目的として自己を認識する力を育てるには不十分なのである。よって読解力の育成＝PISA 型読解力の育成などと考えれば、私たちは学習者に、十分な読解力を育てられないこととなる。

本稿では国語教育において、読みや表現などの手段として自己を認識することと、読みや表現などの目的として自己を認識することの両者が必要であり、両者は相互に関わり合っていると主張したい。文学的文章を扱った授業を想定すれば、自己の認識を読みや表現などの目的としてとらえることは、授業における価値目標に該当し、自己の認識を読みや表現などの手段としてとらえることは、技能目標に該当すると考える。

つまり、自己の認識を読みや表現などの手段としてとらえる PISA 型読解力は、自己認識や自己形成を目指す国語教育を支える技能のひとつとして位置づけられる。学習者に育てるべき読解力について考えるとき、PISA 型読解力は、中でも特に技能的側面をつよく持つ読解力であるととらえるのである。

ただし国語教育においては、読みや表現などの手段／目的という両者の観点を持つことによって、手段としての自己の認識ははじめて技能目標となり、目的としての自己の認識ははじめて価値目標となる。ある授業、ある単元において自己の認識は、手段として、あるいは目的としてどちらかに特化した形で示されることはあっても、手段と目的の両方をつねに見通すことが重要なのである。

以上のような学力観の具体例として、最後に実際の問題例を示しておく（資料）。この問題は、PISA 調査の形式に則りながらも、PISA 型読解力の基準では設問化されない、目的としての自己の認識をも問うことを試みたものである。

この問題例に実際に取り組んだ広島県 Y 中学校（3 年生）では、「熟考・評価」の問題である問 5 において、登場人物 2 人の関係を次のようにとらえる学習者が確認できた。

（だんなさんがおくさんのことを見くびっていると思う理由）
言葉を求めていないのは、相手を下に見ている（から）。（生徒 4）
（だんなさんがおくさんのことを愛していると思う理由）
自分の言ってほしい返事を言わせておくさんに認めてもらいたかった（から）。（生徒 22）

生徒4の解答からは、他者との関係における上下思想をまなざそうとする姿が見られ、生徒22の解答からは、自分が望む形で他者から認められたいという生徒自身の思いをうかがうことができる。このように解答した 2 人の学習者は、他者との関係性というテーマに対し、自己を認識することができたと考える。また、テキ

ストの読み取りを通して、登場人物2人の関係性を「解釈」したり「熟考・評価」したりするという技能目標にも到達していると考える。

読解力を育てる上では、以上のような教材（問題文）の選択および問題設定を行いながら、自己の認識を読みや表現の手段／目的として位置づけることが重要なのである。

5　主要引用参考文献

有元秀文（2008）『必ず「PISA 型読解力」が育つ七つの授業改革―「読解表現力」と「クリティカル・リーディング」を育てる方法』、明治図書

石原千秋（2005）『国語教科書の思想』、ちくま新書

国立教育政策研究所編（2002）『生きるための知識と技能―OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）2000 年度調査国際結果報告書』、ぎょうせい

国立教育政策研究所編（2004）『生きるための知識と技能 2―OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）2002 年度調査国際結果報告書』、ぎょうせい

国立教育政策研究所編（2007）『生きるための知識と技能 3―OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）2006 年度調査国際結果報告書』、ぎょうせい

全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』、明治図書

永田麻詠（2007）「「自己」の視点からみた PISA 型読解力―PISA 型読解力をめぐる論の考察から」、第 113 回全国大学国語教育学会岡山大会発表資料

永田麻詠（2008）「文学を対象とした PISA 型読解力調査の考察―小学校のばあい」、第 114 回全国大学国語教育学会茨城大会発表資料

難波博孝・三原市立三原小学校（2007）『国語科・授業改革双書№2 PISA 型読解力にも対応できる―文学体験と対話による国語科授業づくり』、明治図書

ノニー・ホグローギアン・乾侑美子訳（1979）『にんじんケーキ』、理論社

【資料】　※問題文選択および設問は永田による。

にんじんケーキ

次の文章を読んで、あとの問いに答えてください。

二ひきのうさぎが結婚したとき、これほどに愛の夫婦は、
うさぎの国中探しても見つからないだろう、
と言われたものでした。
夢のような結婚式でした。キャベツのシチューやカブのパイ、
ガラスのおおいをかぶせた、やわらかいレタスもありました。
①若い二人が旅立つとき、花嫁のお母さんは、娘を抱いて、言いました。
「だんなさんを愛し、尊敬する、優しいおくさんにおなり」
花むこのお母さんは、息子を抱いて、言いました。
「おくさんを愛し、いたわっておあげ。悲しませてはいけないよ」

二週間　たちました。
ハネムーンから帰った二人は、新しい生活を始めました。まず、料理。
それから、うさぎ穴のうちそとを整えて、住みよくするしごと。
そして、お互いのことも、もっと知り合わなければなりません。
ある夕方、二人は庭を散歩しました。

「何の話をしようか」だんなさんがききました。

「さあ、私、思いつかないわ」②おくさんは答えました。
「それじゃあ、今日、ぼくが街へ行ったときのことを話そう」
「あら、そう」おくさんは言いました。

「ぼくは、まず、うちのドアを直してもらいに、大工のところへ行った」
「あら、そう」
「それから、このチョッキを買った」
「あら、そう」

「あら、そう、しか言えないのかい」
「何て言ったらいいのかしら」
「いいチョッキだわ、ぼろぼろになるまでそれを着て、
気持ちよく過ごしてくださいな、とでもいいたまえ」
「じゃあ、言うわ」
内気なおくさんは、小さい声で言いました。
「ぼろぼろになるまでそれを着て、気持ちよく過ごしてくださいな」
「うん、それでいいんだ」

「それからぼくは、冬に備えて、たきぎを集めた」
おくさんは、だんなさんに喜んでもらおうと、教わったとおり、言いました。
「ぼろぼろになるまでそれを着て、気持ちよく過ごしてくださいな」
「ちがう、ちがう。ぼくは、たきぎの話をしてるんだ。冬になったら、それを燃やしましょう、
暖かいでしょうね、と言いたまえ」
「あら、今度はそう言うの？冬になったら、それを燃やしましょう、暖かいでしょうね」

「それから、ぼくたちの穴の外壁の、割れ目をふさいだ。まるで、新しいうさぎ穴みたいになったよ」
「冬になったら、それを燃やしましょう、暖かいでしょうね」
「きみ、何を聞いてたんだい。きっと住み心地がいいでしょう、そのうち子どもも生まれるわ、と言うんだよ」
「きっと、住み心地もいいわ」おくさんはつぶやきました。

「それから、食べ物を探しに行ったんだが、わなにかかってしまった」
「きっと、住み心地がいいでしょう、そのうち子どもも生まれるわ」
「わなの中でかい！きみは、こう言うべきなんだ。大丈夫、友だちが助けにきて、あなたを出してくれるわ」
「友達がきて、あなたを出してくれるわ」

「いや、ぼくは何とか一人で抜け出して、パン屋へ行った。にんじんケーキを買おうとしたんだが、
ちょっとにおいをかいだとたん、パン屋のやつに、のし棒で、嫌というほど頭をたたかれた。
目玉が飛び出すかと思ったよ」
「友だちがきて、目玉を出してくれるわ」

「何をばかなことを言ってるんだ。きみは、ひどいパン屋ね、と怒るべきなんだぞ！」
だんなさんはどなりました。
でも、若いおくさんは、こんなことはもうたくさんでした。
「③ひどいのは　あなただわ」おくさんは言って、だんなさんをたたきました。

「おい、きみ、何をするんだい」
「ああ言え、こう言えって、お説教ばかり。私だって、あなたが思ってるほどばかじゃないのに」
おくさんは、またたたきました。
「あれ、あれ」とだけ言ったのは、今度は、だんなさんでした。

「あれ、あれ、しか言えないの？」
「どう言えばいいんだい」
「今日一日、私が何をしていたか、聞いてちょうだい。
私が内気でも、ばかなことをしても、我慢してほしいのよ」
おくさんは泣いていました。

「ぼくは、しゃべるのに忙しくて、きみのことを考えなかったんだ」
「④ときには、だまっているのもいいものよ」
おくさんは言いました。

だんなさんは、おくさんにキスしました。おくさんは、だんなさんに抱きつきました。
二人は、幸せな気持ちで、うさぎ穴に帰って、にんじんケーキを食べました。
何も、話はしませんでした。

ノニー・ホグローギアン・乾侑美子訳（1979）
一部ひらがなを漢字に改めた。

問1、 ——①「若い二人が旅立つ」とありますが、具体的にはどうすることですか。（情報の取り出し）

問2、 「おくさん」はどんな性格ですか。本文中のことばを用いて答えてください。（情報の取り出し）

問3、 ——③「ひどいのは　あなただわ」とありますが、おくさんは何に対して「ひどい」と思ったのでしょうか。次のア～エから合うものを答えてください。（解釈）

ア　だんなさんが、おくさんをおいて街に出かけてしまったこと。
イ　だんなさんが、おくさんのことばを求めていないこと。
ウ　だんなさんが、おくさんにつまらない話を延々と続けること。
エ　だんなさんが、おくさんにお説教をはじめたこと。

問4、 ——④「ときには、だまっているのもいいものよ」とありますが、おくさんはだんなさんとの関係において、何を大切に考えていると思いますか。次の解答欄に合うように答えてください。（解釈）

ひとりよがりなおしゃべりよりも、（　　）を大切にしている。

問5、 この物語の「だんなさん」について、ひろきさんとしのさんは次のように考えました。

【ひろきさん】
だんなさんは、おくさんのことを見くびっていたと思うよ。
【しのさん】
だんなさんは、おくさんのことを愛しているんじゃないかなぁ。

ひろきさんとしのさんは、自分の考えについてそれぞれどのような根拠を示せばよいですか。本文を参考にしながら、解答欄に合うように、自分の考えを書きましょう。（熟考・評価）

【ひろきさん】
だんなさんが、おくさんのことを見くびっていると思うのは、（　　）から。
【しのさん】
だんなさんは、おくさんのことを愛していると思うのは、（　　）から。

連続型テキスト(物語)　「にんじんケーキ」解答（100点）

問1　（例）結婚して、二人だけの生活を新しくはじめること。（20点）

これまでの家族から自立し、二人で新しい生活をはじめるという意図を示しているか。

問2　内気な性格。（20点）

問3　イ（20点）

問4　（例）①相手について②考えること。（20点）

①「相手」「お互い」「おくさんとだんなさん」など、二ひきの関係性を示す記述があるか。（10点）

②――④直前の「ぼくは、しゃべるのに忙しくて、きみのことを考えなかったんだ」というせりふを考慮しているか。「相手を思いやること」「相手の話を聞くこと」「お互いがきちんと向き合うこと」なども可。（10点）

問5　（20点）

（ひろきさんの例）

①自分の話にどう応えてほしいのかをおくさんに押しつけたり、②おしゃべりに夢中でおくさんのことを全く考えていない（から。）

（しのさんの例）

①おくさんが言い返したときには、自分はどうすべきかを考えようとしているし、②うさぎ穴に幸せな気持ちで帰っている（から。）

①だんなさんとおくさんのやり取りを自分なりに解釈しているか。（10点）

②本文の内容を参考にしているか。（10点）